



図1 西建物外観（南西より）



図3 展示状況（東休憩室）



図2 西建物内観（北よりホールを見る）



図4 西建物外観（ホール）

### 3. 東院庭園の復原事業

平成5年度に始まった東院庭園復原事業の最終年度として建物復原関係では西建物（仮称）および南面大垣の復原を行い、庭園関係では園池復原、景石保存処理、給排水施設整備、園路整備、植栽復原、保護柵および仮囲い整備等を行い、付帯施設として宇奈多利の杜西側地区に便所と仮駐車場を整備した。

**建物復原** 平成5年度に始めた東院庭園復原事業の最終年度として建物復原関係では西建物および南面大垣の建設を、庭園関係では園池復原、景石保存処理、給排水施設整備、園路整備、植栽復原、保護柵および仮囲い整備などをおこなった。また付帯施設として、宇奈多利の杜西側地区に便所と仮駐車場を整備した。

**東院庭園の復原建物** 本年度は、西建物と南面大垣の施工をすすめた。

**西建物** 西建物の基本設計（『年報1997-I』P.24,25を参照）および実施設計は昨年度に終了している。今年度の施工では、各部の収まりや部材寸法、仕様について若干修正するにとどめた。4月17日から一般公開に備え、車椅子使用の見学者が西建物から入り庭園内を回遊することを考慮し、西建物の出入口4カ所に取りはずし可能な木製スロープを臨時に設置した。スロープの勾配は1/8、幅は1.7mとし、表面にノンスリップ加工のビニルシートを張った。

また、東院庭園に関する仮展示をエントランスとホールの境、ホールおよび休憩室におこなった。エントランスとホールには、見学者の動線を妨げないようにパネル以外の展示物は基本的に置かず、その境にある大きな一枚ガラスに築山遺構の透過光図面を張った。ホールの東壁面には案内板パネルをかけた。

休憩室では、1989年に製作した東院庭園の1/50模型を中央におき、その周辺の壁面に東から南へ進むようにパネルを展示した。まず入って左、北のガラス壁面で東院について概説し、つづいて東院庭園の発掘状況、庭園史における東院庭園の位置づけ、さらに庭園内の池や復原建物の整備方針、手法などに関して解説した。パネル展示の内容は、全体的には東院庭園のパフレットに基づくが、発掘調査写真を多く示し、整備完了後の写真は使用していない。また西の休憩室には1996年に製作した築山遺構の1/10模型を展示し、常設展示ケースには緑釉瓦などの遺物も陳列した。

**南面大垣** 南面大垣は、既整備部分の東側30m分をこれまでと同様の仕様で復原した。東南隅における東面大垣との取り付け部分は、今年度の第280次調査で、これまでの規模を踏襲することを確認している。この部分は今後整備する予定だが、4月からの一般公開にあたっては仮囲いを施した。

（蓮沼麻衣子）



図1 東院庭園全景



図3 北岸中央部の築山石組み（南から）



図2 南岸から中島、中央建物などを望む



図4 池東北部の給水口、湿地、反橋

**庭園および周辺整備** 園池復原の基本方針は『年報1997-I』P.61に記したとおりであり、この基本にしたがって実施したのであるが、実際の復原に際してはいくつかの問題が生じた。奈良時代後半期の園池の復原案はいくつか考えられるのに対して、実施できるのはそのうちの一案に限る、という復原がかかえる根本的な問題である。地形復原、残存している景石および補充する景石に対する考え方、などが特に問題となった。詳細はいずれまとめられる東院庭園の発掘調査報告、復原整備報告で報告することになるので紙数の限られた本稿では省略する。

樹脂による強化の必要性がある花崗岩、片麻岩については岩石の表面に浸透、固結する合成樹脂（ワッカー社製OH100）を吹き付け、強化した後に、表面の撥水性を高める樹脂（同社製280）を吹き付け保護を図った。撥水剤については今後、年1回程度吹き付けを続けていくことが望ましい。

給水は本来の給水路である園池北側の石組溝以外に、停滞する池水を押し出すために園池入り込み部の池底9箇所に円形の給水管を埋設し、池全体の水の流れを確保した。円形給水管はステンレス鋼管（40、50mm）を径100cm（6個）、150cm（3個）の円形に丸め、上面に径5mmの小孔を30～40個穿ち、ここから水を吹き出させている。これを池底に置き、上に砂利を被せて管を隠す

とともに、水圧による水面の盛り上がり防止した。排水は本来の排水口である園池東南隅に箱形のコンクリート製暗渠を埋設し、ここを経由して南面大垣の南に設けた受水槽に池水を導き、ここからポンプで宇奈多利の杜西側の浄化槽に送るシステムである。受水槽は最後尾に設けた堰の高さを調節することで常にわずかつオーバーフローし、外へ水が溢れ出る仕組みであり、これで池の水位を一定に保っている。

西殿を経由して入ってくる見学者は園池の西を限る南北塀南端部から園内に入り、反時計回りに園内を一周し、同塀中央部から外へ出る動線とした。園路はソイルセメント土に砂利を埋め込む舗装とし、幅は平均2mである。

園池の周囲には植栽を推定復原した。出土植物遺体、文献史料等から樹種を選定し、発掘調査で確認した樹木採取穴などにもとづいて位置を決めた。主な樹種はアカマツ、ヤマザクラ、ウメ、モモ、スモモ、ヤナギ、ツバキ、ツツジ類、ハギ、ヤマブキなどであり、目隠し植栽としてカシ類を柵沿いに配置した。園池東北隅の給水池付近にはセキショウ、カキツバタ、ヤブコウジなどの草本を植えた。

園池西北部の未買収地との境には縦格子の保護柵と内側に植栽を、隅楼と大垣の復原が未了の東南隅部は仮囲いと植栽で閉塞し、公開に備えた。

（高瀬要一）